

京都大学 大学院工学研究科・工学部
概要 2023

京都大学

大学院工学研究科・工学部

概要 2023



編集・発行

京都大学 工学研究科・工学部 広報委員会

京都大学桂地区（工学研究科）事務部 総務課 企画広報掛

〒615-8530 京都市西京区京都大学桂

TEL : 075-383-2010 <https://www.t.kyoto-u.ac.jp/>

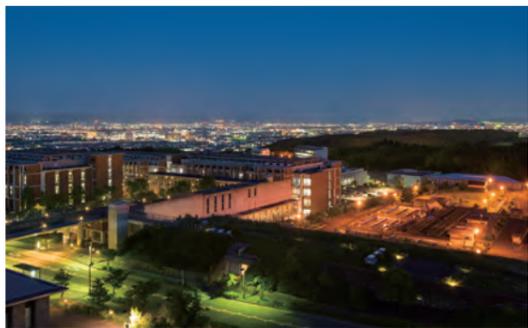
令和 5 年 7 月発行



京都大学 工学部・大学院工学研究科 Web サイト

目次

1	京大工学の理念・ビジョン	2
2	沿革	3
3	組織	5
4	工学部の学科	7
5	工学研究科の専攻	8
6	附属教育研究施設等	13
7	新しい動き	15
8	国際交流の状況	21
9	京大工学基金のご紹介	23
10	財政状況	24
	データ	25
	アクセスマップ	29



1 京大工学の理念・ビジョン

「自由の学風を継承し、発展させつつ、多角的な課題の解決に挑戦し、地球社会の調和ある共存に貢献する」ことを目的とする京都大学の基本理念を実現するために、京都大学大学院工学研究科・工学部が定める理念とビジョンをご紹介します。

京都大学大学院工学研究科・工学部の理念と目標

● 理念

学問の本質は真理の探求である。

その中であって、工学は人類の生活に直接・間接に関与する学術分野を担うものであり、分野の性格上、地球社会の持続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っている。

京都大学大学院工学研究科・工学部は、上の認識のもとで、学問の基礎や原理を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成する。

このような研究・教育を進めるにあたっては、地域社会との連携と国際交流の推進に留意しつつ、研究・教育組織の自治と個人の人権を尊重して研究科・学部の運営を行い、社会的な説明責任に応えるべく可能な限りの努力をする。

● 目標

工学研究科・工学部は、工学のあり方と部局としての使命を次のように考える。

上に述べた理念を使命とし、構成員個々の「主体性」を尊重する「自由の学風」を継承しつつ達成することが、工学研究科・工学部の基本的目標であり、より具体的には自由闊達な知的活動から生み出される知と技術の創造とその継承を目指すことである。

京都大学大学院工学研究科・工学部のビジョン

基礎研究と応用研究を一体化し、研究を通じての学びで考える力を鍛え、地球社会に対して責任を取り続ける

京大工学での研究

基礎研究と応用研究を一体化させる

実験的研究と数学的解析を結合して科学的知識を深める基礎研究と、科学的知識に基づき実践的な課題解決を目指す応用研究とを一体化させた研究を進めることが京大工学の伝統です。これらを両輪として、これまで誰も考えつかなかった「ものづくり」を実現する科学技術、そして持続可能な地球社会を実現する科学技術を創出することが京大工学の目指すところです。

京大工学での学び

研究を通じての学びで考える力を鍛える

大学での研究は、新しいことへの挑戦です。これまでの研究の蓄積をもとに、自ら研究課題を見出し、それぞれの課題の解決に挑むことになります。研究を通じた学びによって考える力を鍛え、自己を磨くことが京大工学での学びです。時には困難にぶつかるでしょう。そのときに、同じように努力する仲間や教員と対話し、新しい視点や気づきを得て、自ら考え課題を解決する力を身につける場が京大工学です。

京大工学のミッション

地球社会の持続的な発展に対して責任を取り続ける

工学の目的は科学技術を発展させ、その成果を通じて人々の生活を支え豊かな社会を構築することです。地球社会を持続的に発展させるためには、人々の生活や社会を脅かす様々なリスクに対応し、課題解決に貢献する技術を開発する必要があります。私たちは、我々の未来がどうあるとよいかを考え、地球社会の持続的な発展に貢献し、地球社会の持続性に対して責任を取り続けます。



立川 康人
大学院工学研究科長・工学部長
(社会基盤工学専攻 教授)

2 沿革

1897(明治30)年6月18日、京都帝国大学が創立され、理工科大学(理学部と工学部の前身)として京都大学はスタートしました。その意味では京都大学の歴史は工学部の歴史でもあります。学科・専攻の変遷を中心に、京大工学の今と昔を振り返ります。



総合研究9号館



物理系校舎



建築学部本館



桂キャンパスAクラスター



桂キャンパスCクラスター

京都帝国大学創設
理工科大学開設

1947年
京都帝国大学が京都大学と改称

1949年
新制京都大学設置

大学院重点化完了
桂キャンパス開学
2020年
桂図書館開館

1897年 電気工学科、土木工学科、機械工学科設置

1898年 電気工学科、採鉱冶金学科、製造化学科設置

1914年 理工科大学を理科大学と工科大学に分離、土木、機械、電気、採鉱冶金、工業化学科設置

1919年 建築学科設置
工科大学は工学部となる

1920年 建築学科設置

1939年 燃料化学科設置

1940年 化学機械科設置

1941年 繊維化学科設置

1942年 採鉱冶金学科を鉱山学科と冶金学科に分離、航空工学科設置

1946年 航空工学科廃止、応用物理学科設置

1953年 電子工学科設置
大学院工学研究科設置

1954年 応用物理学科を航空工学科に改称

1955年 原子核工学科、衛生工学科設置

1957年 原子核工学専攻設置

1958年 原子核工学科、衛生工学科設置

1959年 数理工学科設置

1960年 精密工学科、合成化学科設置

1961年 電気工学第二学科、金属加工工学科設置、繊維化学科を高分子化学科、化学機械学科を化学工学科に改組、改称

1962年 機械工学第二学科設置

1963年 交通土木工学科設置

1964年 建築学第二学科設置、鉱山学科を資源工学科に改称

1966年 燃料化学科を石油化学科に改組、改称

1970年 情報工学科設置

1975年 機械工学第二学科を物理工学科に改組、改称

1983年 分子工学専攻設置

1987年 応用システム科学専攻設置

1991年 環境地球工学専攻設置

1993年 化学系の改組 ※

1994年 物理系の改組

1995年 電気系の改組、数理工学科、情報工学科を情報学科に改組

1996年 地球系、建築系の改組

2003年 地球系、建築系がAクラスターへ移転

2004年 地球系、建築系がCクラスターへ移転

2005年 地球系がCクラスターへ移転

2006年 地球系がCクラスターへ移転

2013年 物理系がCクラスターへ移転

地球系	※
工学部	地球工学科
工学研究科	社会基盤工学専攻 / 都市社会工学専攻 / 都市環境工学専攻
建築系	
工学部	建築学科
工学研究科	建築学専攻
物理系	
工学部	物理工学科
工学研究科	機械理工学専攻 / マイクロエンジニアリング専攻 航空宇宙工学専攻 / 原子核工学専攻 / 材料工学専攻
電気系	
工学部	電気電子工学科
工学研究科	電気工学専攻 / 電子工学専攻
化学系	
工学部	工業化学科
工学研究科	材料化学専攻 / 物質エネルギー化学専攻 / 分子工学専攻 高分子化学専攻 / 合成・生物化学専攻 / 化学工学専攻

■ 工学と関連のある研究科等の設置

1996年 エネルギー科学研究科
1998年 情報学研究科
2002年 地球環境学舎・学堂

■ 工学研究科が輩出したノーベル賞受賞者

1981年 化学賞 福井謙一(名誉教授)
2001年 化学賞 野依良治(卒業生)
2019年 化学賞 吉野 彰(卒業生)



3 組織

京都大学工学部・工学研究科は、京都大学の中でも最多の学科数・専攻数を有しています。



(令和5年4月1日現在)

桂地区（工学研究科）事務部

総務課

総務掛
企画広報掛
人事掛
学術支援掛
利用支援掛
Aクラスター事務区庶務掛
Cクラスター事務区庶務掛

管理課

財務企画掛
財務分析・評価掛
環境管理掛
施設管理掛

経理課

契約掛
運営費・寄附金掛
旅費・謝金掛

教務課

教務掛
大学院掛
留学生掛
Aクラスター事務区教務掛
Cクラスター事務区教務掛

学術協力課

研究・国際支援掛
産学交流掛
産学連携掛
補助金掛
研究施設支援掛

(令和5年4月1日現在)

工学部	学科長	大学院工学研究科	専攻長
地球工学科	馬淵 守	社会基盤工学専攻	須崎 純一
		都市社会工学専攻	宇野 伸宏
		都市環境工学専攻	高岡 昌輝
建築学科	平田 晃久	建築学専攻	原田 和典
物理工学科	花崎 秀史	機械理工学専攻	嶋田 隆広
		マイクロエンジニアリング専攻	泉井 一浩
		航空宇宙工学専攻	大和田 拓
		原子核工学専攻	宮寺 隆之
		材料工学専攻	邑瀬 邦明
電気電子工学科	松尾 哲司	電気工学専攻	阪本 卓也
		電子工学専攻	野田 進
情報学科	矢ヶ崎 一幸		
工業化学科	関 修平	材料化学専攻	浦山 健治
		物質エネルギー化学専攻	藤原 哲晶
		分子工学専攻	佐藤 啓文
		高分子化学専攻	杉安 和憲
		合成・生物化学専攻	三木 裕明
		化学工学専攻	佐野 紀彰

(令和5年4月1日現在)

附属教育研究施設等

センター長

附属光・電子理工学教育研究センター	野田 進
附属流域圏総合環境質研究センター	伊藤 禎彦
附属量子理工学教育研究センター	高木 郁二
附属桂インテックセンター	横峯 健彦
附属情報センター	村上 定義
附属環境安全衛生センター	松田 建児
附属工学基盤教育研究センター	安部 武志
附属学術研究支援センター	横峯 健彦
工学研究科次世代学際院	横峯 健彦

(令和5年4月1日現在)



桂キャンパスバス路板

詳細はこちら



4 工学部の学科

地球工学科

地球の合理的な開発・保全

地球工学は、文明を支える資源・エネルギー、持続的に社会を支えるインフラの発展、そして人類が自然と共生するために必要な環境の維持など、諸技術体系とその融合分野で構成されます。多岐にわたる科学技術を総合的に理解する見識を養う教育をめざし、「Think Globally and Act Locally」を理念に掲げ、地球全体の合理的な開発・保全と人類の持続可能な発展を支える高度な研究や実務を遂行できる能力を養っています。国際的技術者の育成に必要な、すべての講義が英語で行われる「国際コース」も設置されています。



詳しくはこちら



建築学科

ヒューマンな技術を学ぶ

人間の生活環境を構成する建築は、安全で健康にして快適な生活を発展させる基盤であり、多様な技術を総合して創造されます。建築は人間生活のあらゆる面に深く密接にかかわるヒューマンな技術といえます。建築学科では、自然科学だけでなく、人文・社会科学や芸術に深い関心をもつ学生もひとしく歓迎し、その才能を伸ばす教育を行います。卒業後の進路も、建築家、建築技術者、建築行政担当者、大学や企業の研究者、コンサルタント、プランナーなど、実に多様です。



詳しくはこちら



物理工学科

新技術の創造人材の養成

21世紀を起点とする次代に向けて、物理工学分野には新たなシステムや材料、エネルギー源の開発などに加え、宇宙空間の利用といった課題解決への期待が寄せられています。こうしたニーズに応える新技術を創造するには、基礎的学問を十二分に修得する必要があるという観点から「物理工学科」では、基礎重視の教育・研究を進めています。さらに機械システム学、材料科学、宇宙基礎工学、原子核工学、エネルギー応用工学の5コースが連携し、高い専門的能力と広い視野を持つ人材を育成します。



詳しくはこちら



電気電子工学科

産業や生活基盤を支える科学技術を

電気電子工学は、現代社会のあらゆる産業や社会インフラに不可欠な科学技術を支えるだけでなく、21世紀を豊かにするための重要な役割を担っています。そのため電気電子工学科では、幅広い領域におよぶ総合的な知識と高い専門性に加え、複眼的な視野や卓越した独創性、倫理観を備えた人材の育成をめざしています。カリキュラムは基礎学習のあと、各自が志望にあわせて専門科目を履修します。こうした4年の学びを通して最先端の科学技術を理解しながら、電気電子工学の発展が担える知識と技術を身につけます。



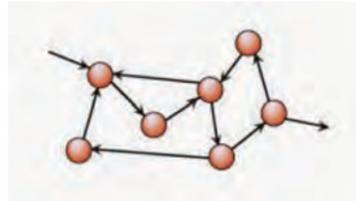
詳しくはこちら



情報学科

複雑なシステムの問題を解決

社会の高度情報化にともない、多様な分野に現れる数理モデルの解析や、複雑な情報システムを通じて収集される膨大なビッグデータの分析や活用が必要とされています。そのためにはシステムの機能はもとより、そこに流れる「情報」の本質を究明し、それに基づいて効率的なデザインを行うための思考力が重要になってきます。「情報学科」では、実世界に現れる複雑なシステムの諸問題を数理的アプローチにより解決するとともに、計算機のハードウェア、システム・ソフトウェア、情報システムを設計・活用できる人材となることをめざして学びます。



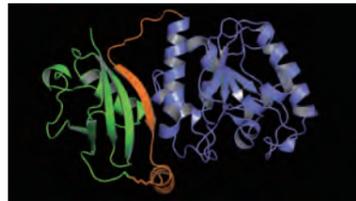
詳しくはこちら



工業化学科

最先端科学技術の基盤を担う

化学は、さまざまな物質をつくる反応とそのプロセス、物質がもつ機能や物性を対象とする学問です。「工業化学科」は、持続可能な社会を作り出すために、地球規模課題への対応が求められる工業に対して、創造的な基礎技術・先端技術の開発や学際領域の研究を推進しています。化学に関連した広い分野にわたる基礎化学と工学を重視した教育を行い、エネルギーの創出やもの作りのための有効利用、蓄電などカーボンニュートラルを支える化学分野で活躍できる研究者ならびに技術者を育成します。



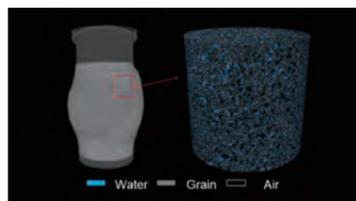
詳しくはこちら



5 工学研究科の専攻

社会基盤工学専攻

新たな産業と文明を開き、環境と調和して、安全・安心で活力ある持続可能な社会を創造するためには、人類が活動する領域とそこにある社会基盤構築物を対象とした技術革新が欠かせません。社会基盤工学専攻では最先端技術の開発、安全・安心で環境と調和した潤いのある社会基盤整備の実現、地下資源の持続的な利用に重点を置き、社会基盤整備を支援する科学技術の発展に貢献します。そのために、地球規模の環境問題とエネルギー問題を深く理解し、国際的かつ多角的な視野から新たな技術を開拓する工学基礎力、さらに実社会の問題を解決する応用力を有する人材を育成します。



詳しくはこちら



都市社会学専攻

都市社会学専攻は、高度で豊かな生活の質を保障しうる都市社会システムの実現を目指して、高度情報通信技術、社会基盤技術、エネルギー基盤技術の融合を図るために、都市工学・交通工学・ロジスティクス工学・地球資源工学などの都市活動を分析する技術や、都市計画・交通計画などの計画技術、安全で持続可能な都市システムを実現するためのライフライン、地盤、河川などに関わる社会基盤を高度化する技術、都市ガバナンス及び都市基盤マネジメントという概念の下での新たな都市エネルギー資源論を構築するための技術、さらには持続可能性評価を含めた都市システムの総合的なマネジメントを行うための方法論や技術の確立を目指しています。

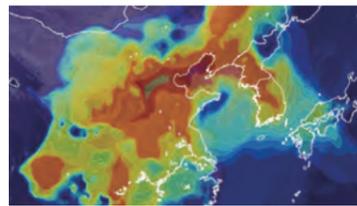


詳しくはこちら



都市環境工学専攻

気候変動等の地球環境問題に代表されるように、科学の進歩がもたらした人類の発展はいまや地球規模での限界に直面しています。また、地球上には、高齢化・価値観の多様化に困惑する社会が存在する一方で、人口爆発や人間安全保障の未充足に苦しむ社会が依然存在します。都市環境工学専攻は、これらの問題解決の要請に応えるべく、学内の関連部局・専攻とも連携し、個別の生活空間から地域及び地球規模に至る幅広い環境場を対象として、顕在化／潜在化する地域環境問題の解決、健康を支援する環境の確保、持続可能な地球環境・地域環境の創成、新しい環境科学の構築を念頭に教育・研究を推進します。



詳しくはこちら



建築学専攻

建築学は人類の生活に関与する多様な学術分野を担っており、地球環境の持続的な発展と文化の創造に対して大きな責任を負っています。高度な機能を有し、安全・安心を維持し、文化創造を推進するための多様な建築空間を実現するため、建築学における計画・構造・環境の各分野の基礎的部門の教育と先端的研究を推進するとともに、建築を自然環境と生活環境のなかで総合的・実践的に捉え直し、既成の専門分野にとらわれずに分野横断的で幅広い専門的知識と創造性を修得させる教育・研究を行っています。



詳しくはこちら



機械理工学専攻

機械工学では、マイクロからマクロにわたる広範な物理系をその対象として、生産システム、エネルギー、環境、生活、生命・生体・医療などに関する人間のための技術の進展を図ります。その基礎となる学は、材料・熱・流体の力学と物性物理、機械力学、振動工学、制御工学などであり、さらにその基礎には、機械システムとそのエレメントの設計・製造・評価・診断・制御に関する工学の考え方が求められます。機械理工学専攻では、人間と自然との共生を目指す広い視野をもって、これらの知恵や知識を主題とする研究・教育を行い、また、挑戦的に課題を設定しそれを克服する能力をもってリーダーとなりうる技術者・研究者を育成し、社会と産業界の期待に応えるべく努めています。

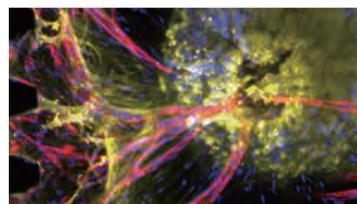


詳しくはこちら



マイクロエンジニアリング専攻

マイクロエンジニアリング専攻は、21世紀の人間社会・生活に大きな変革をもたらす原動力として期待されている微小な機械の研究能力と開発能力を有する研究者・技術者を養成する教育・研究課程です。機械工学の基本知識をベースに、ナノメートルオーダーからマイクロメートルオーダーの微小領域特有の現象を解明し、ナノレベルで発現する量子効果の利用に必要な量子工学、材料を創製し加工するための微小領域における材料工学・微細加工学、ナノ・マイクロシステムを構築し思い通りに動かすためのシステム工学・制御工学、そして、最も精密な微小機械の集合である生体に学び、生体の機能解明や分子・細胞を応用することを目的としたバイオエンジニアリングに必要な学問分野を有します。

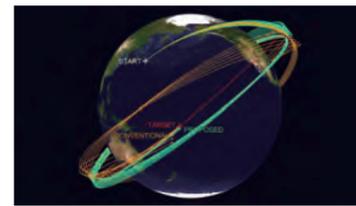


詳しくはこちら



航空宇宙工学専攻

航空宇宙工学専攻では大別して、航空宇宙機の航行に関わる航空宇宙環境との相互作用、航空宇宙機の推進とエネルギー、航空宇宙機の材料・構造強度、航空宇宙機のシステム・制御などを研究対象としています。航空宇宙工学というフロンティアを切り開くため、当専攻では基礎的な科学と工学を最重要視しています。いかえると、第一の使命は単に航空宇宙に限定されず新しい可能性に向けた先端工学の扉を開くこと、第二の使命は深い知識に基づいてオリジナルなアイデアを十分に創造できる科学技術者を育てることです。

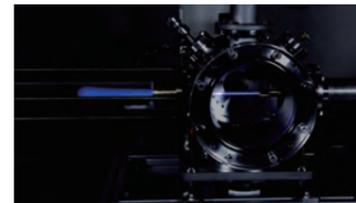


詳しくはこちら



原子核工学専攻

原子核工学専攻は、素粒子、原子核、原子や分子など、量子の科学に立脚したミクロな観点から、量子ビーム、ナノテクノロジー、アトムテクノロジーなど、最先端科学を切り開く量子テクノロジーを追求するとともに、物質、エネルギー、生命、環境などへの工学的応用を展開して、循環型システムの構築を目指しています。そして、体系的かつ立体的な教育・研究を通じて、先端的研究者や高度専門技術者などの人材を育成しています。このような研究・教育によって、人間社会のより豊かで持続ある発展に貢献しています。

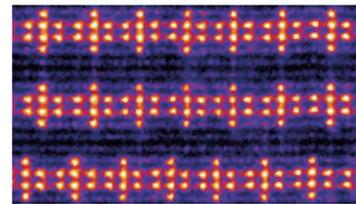


詳しくはこちら



材料工学専攻

材料科学・材料工学は、未だ世にない新しい物を創るために必要な新たな材料を創造する学問・技術です。そのままだと錆びてしまぼろぼろになる鉄から、錆びにくいステンレス鋼をはじめとする様々な優れた特性を有する合金鋼が創りだされ、世の中の機械・建築構造物の設計は大幅に変更されるに至りました。これまでの歴史が示しているように、新材料の開発は革新技術の発展においてパラダイムシフトを引き起こします。材料工学専攻では、構造材料、機能性材料の開発・実用化を目指した多岐にわたる基礎研究を推進しています。



詳しくはこちら



電気工学専攻

電気工学は、電気・電子に関わる技術を社会の様々なところで利用していく上での基礎的な学問分野です。例えば、脱炭素社会の実現に向けて期待を集める電気自動車や風力発電は電気工学の賜物ですし、第5世代移動通信システム、いわゆる5Gのような電磁波を使った通信技術も電気工学を基礎として成り立っています。これらは、電気工学がカバーする領域のごく一部に過ぎず、電気工学専攻では、先端電気システム論、システム基礎論、生体医工学、電磁工学の4講座、ならびに、1つの協力講座と1つの寄附講座において、広範な領域における教育研究を行っています。

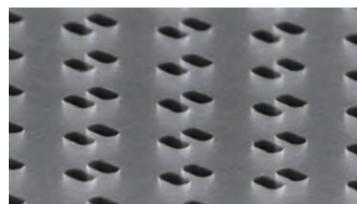


詳しくはこちら



電子工学専攻

電子工学専攻では、次世代のオプトエレクトロニクスを支える基幹技術の実現を通じた社会への貢献を目標とし、「光」と「電子」をキーワードとした新しい概念の提唱とそれに基づく革新的材料・デバイスの創製に関連する教育・研究を進めています。具体的には、光の究極的な制御として、例えば、従来の半導体レーザーの常識を覆す、短パルス・高ピーク出力フォトニック結晶レーザーの実現、新ワイドギャップ半導体材料の物性解明やこれを用いたパワーエレクトロニクス素子の設計と作製、半導体における発光機構のナノレベルでの解明や高効率発光素子応用など、広範囲な分野で世界の先端を走る研究を展開しています。

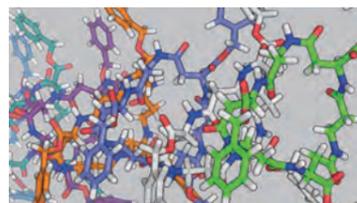


詳しくはこちら



材料化学専攻

化学はいま、新物質を作る技術に加えて、物質を構成する分子の生い立ちや性質を調べ、物質特有の機能を探索する学問に変貌しつつあります。材料化学専攻では、無機材料、有機材料、高分子材料、ナノマテリアルを中心に、その構造と性質・反応性を分子レベル及びナノレベルで解明しながら、新しい機能や性質をもった材料を化学的に設計するとともに、その創製方法を確立することを目的として研究・教育を行っています。材料化学専攻では、統合的科学的に基づいた新規機能材料の開発を推進するため、専攻内のみならず専攻を越えた研究交流や研究協力体制の構築を進めています。

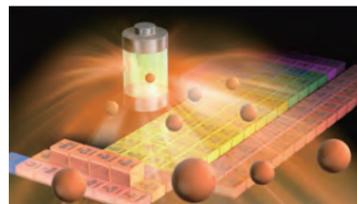


詳しくはこちら



物質エネルギー化学専攻

「化学」という学問は、これまで未知であった自然科学の現象を実験と理論により解明し、新しい原理を構築することを目標とする学問であり、それらの成果を人々の生活や社会にとって有用な形で還元する責務を担っています。物質エネルギー化学専攻では、第一に、基礎化学の効果的な継承と新しい学理の構築、第二に、それらを基盤とし、「物質」および「エネルギー」の高効率変換を実現する高い独創性と学術的意義を持つ革新的技術を創出し、資源の高効率循環を達成するための研究を推進しています。これらの研究を通じて、問題発見、課題設定、問題解決を自律的に行い、かつ倫理性の高い優れた人材を継続的に育成しています。



詳しくはこちら



分子工学専攻

化学は物質の変換を扱う学問であるとともに、物性を電子構造・分子の配列と相互作用などとの関連で論じ、新しい機能をもつ分子や材料の設計を行う学問として、ますますその分野をひろげつつあります。分子工学は、原子・分子・高分子などが関わる微視的現象を対象とする基礎学問を支柱として、原子・分子・高分子の相互作用を理論的、実験的に解明し、その成果を分子レベルで直接工学に応用する新しい学問領域です。分子工学専攻では、分子論的視野に立って、斬新な発想で基礎から応用への展開ができる研究者・技術者を育成することを目的として、新しい電子材料やエネルギー・情報関連材料などの開発のための基礎的研究を展開しています。

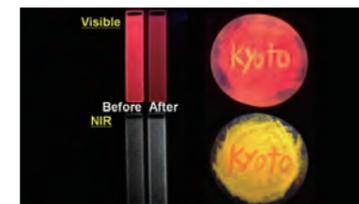


詳しくはこちら



高分子化学専攻

高分子化学は、基礎学問としての物質科学と、実用的なニーズを背景とする応用科学とが融合した学問分野であり、基礎-応用、合成-物性、理論-実験、有機-無機、マイクロ-マクロ等々、さまざまな視点において幅広いスペクトルをもつ分野です。高分子化学専攻では、光・電子・情報分野、高機能材料、再生医療、ナノテクノロジーなど、次々と生まれる高分子の発展分野を支えるため、高分子の生成、反応、構造、物性、機能について基礎研究と教育を行うとともに、その成果を社会に還元し、関連する学術分野との連携を通して、新たな科学技術の創成に貢献することを目指しています。また、高分子を基礎とする先端領域において活躍できる能力を備えた研究者、技術者の養成をしています。

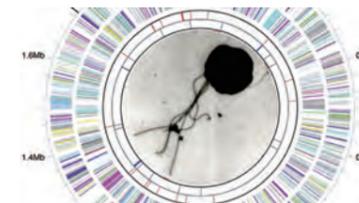


詳しくはこちら



合成・生物化学専攻

合成・生物化学専攻では多彩な物質と機能を創り出す学問である合成化学と、生物の機能を解明し利用する生物化学との学際領域を密接な連携をもとに開拓し、総合精密化学としての創造性豊かな化学分野を確立することを理念としています。合成化学講座及び有機設計学講座では、効率的合成を目指した物質変換の基礎と応用、無機・有機複合分子集積系の機能、さらに分子や分子集合体の構造と反応性・物性の相関を明らかにすることを目標としています。生物化学講座では、分子/システム/細胞/生体（個体）など様々な階層における生命現象を分子レベルで理解し制御するとともに、生物機能・生体物質を利用し、斬新な機能を持つ物質を生み出すことを目指しています。



詳しくはこちら

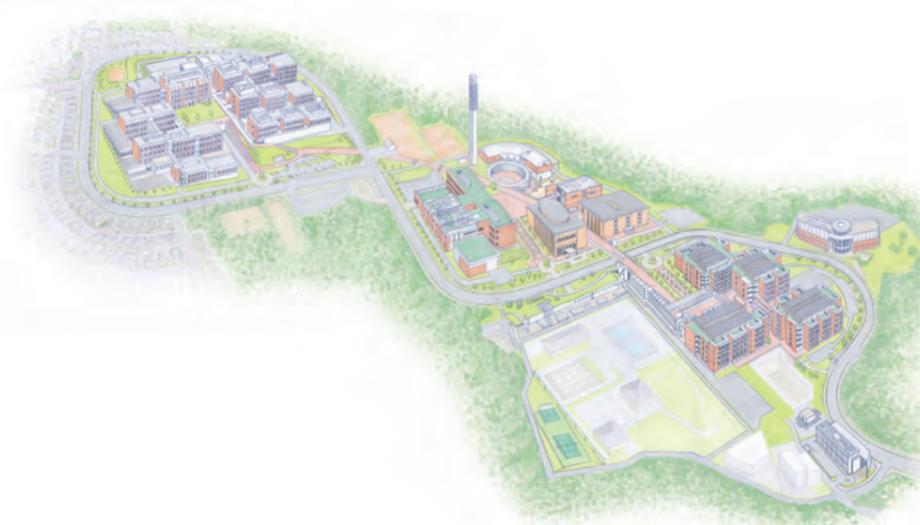


化学工学専攻

化学工学の特徴は対象とするプロセスから要素となる現象を抽出し、その本質と動的特性を定量的に捉え、さらに、最適システムを構築して、物質、材料の高機能化と物質、エネルギーの効率的生産のための方法論を探究することにあります。人類に有用な機能をもつ物質及び材料を化学的変換によって創出する。物質、材料、エネルギーを環境に優しく、効率よく生産する方法を提案する。化学工学専攻ではこのような課題について教育、研究を行っています。



詳しくはこちら



6 附属教育研究施設等

附属光・電子理工学教育研究センター

光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創成・社会実装拠点の構築、ならびに新学術創成に向けた先進教育研究拠点形成を目指して活動しています。

本センターの目的は、光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創出・社会実装を行う拠点の形成と、新学術創成を目指す先進教育・研究拠点の構築を行うことにあります。

21世紀は、光・電子・量子の時代と言われています。世界規模で情報処理量とエネルギー消費が継続的に増大する中で、将来にわたって世界が持続的に発展するためには、現実空間と仮想空間を高度に融合した超スマート社会（Society 5.0）の実現や、実質的な二酸化炭素排出量をゼロとするカーボンニュートラルの達成が不可欠です。そのためには、自動運転（スマートモビリティ）、スマート製造、量子演算、さらには、エネルギーの有効活用が不可欠で、その核となる光・電子・量子を自在に操るための技術革新が極めて重要といえます。本センターでは、深い物理的思考に基づく教育研究背景をもつメンバーと、社会実装を願う産業界のメンバー等を結集し、京都大学が世界に誇る「フォトニック結晶」「フォトニックナノ構造」「ワイドバンドギャップ材料」技術等を駆使して、光・電子・量子の自在な制御を可能とする最先端技術の創出および社会実装拠点形成を進めています。さらに、2022年度より、寄附講座「先端スマートセンシング（ソニーセミコンダクタソリューションズ）講座」をも設置し、活動範囲を大きく広げています。また、本センターは、「先端光・電子デバイス創成学」卓越大学院教育の一端をも担っており、情報学研究科や、理学研究科等とも連携しながら、光・電子・量子分野における新学術創成を目指す先進教育研究拠点の構築を進めています。



詳しくはこちら



附属流域圏総合環境質研究センター

有害物質を制御・評価・緩和することで環境質を向上させることを目指します

環境の質に焦点を置いて、制御、評価、緩和の3領域の有機な連携の下に環境汚染物質による人間及び生態系への有害影響に関する工学的研究の総合化と教育機能の拡充を目指しています。外国からの招聘教授の制度を有していることも特徴です。人間や生態系に直接影響のある問題に対する世界的な関心が高まり、環境状態のわずかな変化が蓄積的・累積的に及ぼす影響の重大性が認識される現状から見て、当研究センターでの成果は大いに期待されています。



詳しくはこちら



附属量子理工学教育研究センター

粒子線加速器を用いたナノスケール科学の研究と支援を行います

本センターは粒子線加速器からのイオンビームや電子線、X線などの機能性の高い量子線を用いて、原子レベルで起こる現象の観測や、機能性の高い新材料・デバイスの開発を推進することによって、物質科学、医学、エネルギー、環境などの分野に貢献することを目的としています。また、粒子線加速器を学内・学外の共同利用に供し、イオンビーム分析や材料照射などを通じて、先進教育と先端研究を積極的に支援しています。さらに、設置している核燃料施設では核燃料サイクル技術の基礎研究に取り組んでいます。



詳しくはこちら



附属桂インテックセンター

専門分野の枠組を越え、世界を先導する新しい技術を創出します

専攻、研究科の枠組みを越えた研究者群で組織された、複数の研究部門が設置され、最先端の戦略的研究を行うとともに、世界を視野に入れた対外的な顔として研究交流等も行います。また、今後大きな発展が期待される5つの実験室（オープンラボ）を有し、さまざまなプロジェクトグループが利用しています。



詳しくはこちら



附属情報センター

工学研究科の情報基盤の整備とその円滑な運用をサポートします

工学研究科附属情報センターは、京都大学大学院工学研究科の情報基盤の運営を行う組織として2002年に設立されました。

本センターでは、研究科の研究・教育・運営の支援として情報システムの構築・運用、情報セキュリティおよび情報リテラシー教育を行っています。また全学のモデルケースとして最新技術の導入にも積極的に取り組み、学内サービスの向上に貢献しています。



詳しくはこちら



附属環境安全衛生センター

工学研究科で学び働く人々の快適環境をサポートします

工学研究科を環境にやさしく安全衛生に配慮した教育研究にふさわしい場にするを目的とし、労働安全衛生法等の安全衛生関係諸法令の遵守ならびに環境保護に向けた業務を一元的に行います。本センターでは作業管理、作業環境管理、健康管理について専門の教員・技術職員を配置し、作業環境測定や化学物質管理システムの運用などを通じて、工学研究科の教育研究活動をサポートします。



詳しくはこちら



附属工学基盤教育研究センター

工学基盤教育研究センターは多様化する工学教育の現状に機能的かつ頑健に対応するため、工学研究科・工学部における工学教育の革新及び国際化教育のより一層の強化を図り、将来にわたって盤石たる工学の基盤教育を築くことをミッションとしています。

若手教員のFDや工学部・工学研究科共通型科目を所掌する他、大学教育の国際化およびグローバル人材育成のために、EdTechの活用による留学生教育の高度化、学生および若手研究者の留学・海外派遣事業の推進、On-site Lab・ダブルディグリーを組み合わせ合わせた積極的かつ戦略的な国際連携開拓を進めていきます。

さらに、社会との繋がりを意識し起業家精神を涵養するアントレプレナーシップ教育を、学部・大学院共通型科目として結実させ推進しています。



詳しくはこちら



附属学術研究支援センター

研究者の方々の研究に関わる様々な業務を支援します

当センターは、文部科学省「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業の一環で、研究者の様々な研究活動を支援するために設置されました。研究者の方々が行う、競争的資金の獲得、プロジェクトの管理、産官学連携の推進等を支援します。



詳しくはこちら



工学研究科次世代学際院

組織の壁をこえた協働ができる人材の育成を行います

工学研究科次世代学際院（Interdisciplinary Research Institute for the Next Generation, iRING）は、新たな総合知の修得と実践により次世代を担う研究者を育成することを目的として2023年4月に設置されました。研究を通じた異分野交流の場を設定することで、若手研究者が「知の互換性」を考え、個別の専門性と他領域の知を統合し新たな分野を切り拓く能力を涵養します。



詳しくはこちら



7 京大工学の新しい動き

京都大学工学部・工学研究科では、教育研究の発展に資する独自の施策を積極的に実施するとともに、日々革新的な研究が行われています。その一部を紹介いたします。

桂図書館を起点としたテクノサイエンスヒル桂構想の実現

桂キャンパスでは、工学研究科、桂図書館、桂キャンパス URA の連携のもと、テクノサイエンスヒル桂構想の実現に向けて取り組んでいます。具体的には、「研究支援機能を備えた新しい図書館」をコンセプトとした桂図書館から、「展示」、「WEB/ 動画」、「試験実装」、「イベント」を4本柱として桂キャンパスの研究シーズを発信することにより、イノベーション創出基盤の創成、産学連携ネットワークの構築を図っています。

令和4年度は、京都大学が全学的な研究支援として重視している「多様な研究者が活躍できるダイバーシティ実現」の観点から、女性研究者の活躍例を紹介するとともに、産学の専門分野を通じたネットワーク構築を図ることを趣旨とした、女性研究者産学連携ネットワークイベント「桂ジェンダーネットワーク（桂ジェネ）」を初めて開催しました。当日は基調講演、研究発表、オープンディスカッション、展示を行い、オンラインと会場合わせて73名が参加しました。



学部・大学院教育のさらなる向上・充実

工学部独自のFD（Faculty Development）活動として、工学部教育シンポジウムを開催しています。令和4年度は、「未来に持続可能な工学教育を考える」をテーマとし、高大接続事例やコロナ禍における教育の在り方にかかる情報交換、討論を行いました。

また、一般社団法人八大学工学系連合会の事業の一つである八大学工学系連合会博士フォーラムを本学が幹事校として開催しました。テーマは「日本が描く博士の未来～博士号取得者をどうしたいのか」とし、企画運営を本学の博士後期課程の学生が担当しました。当日は基調講演、パネルディスカッション、そして登壇者と参加者を少人数グループに分けた討論を行い、オンラインと会場合わせて130名以上が参加しました。



積極的な京大工学の魅力発信

京大工学の特色や強みを分かりやすくアピールすることを目的として、新たに中高生向け導入冊子「京大工学ってどんなところ？」を作成したほか、「京都大学大学院工学研究科・工学部概要」をリニューアルしました。京大工学ホームページでは、受験生向け特集ページ「京大工学への第一歩！」（学部）、「京大工学を極める。」（大学院）を新設し、教員・学生の生の声を中心にコンテンツを掲載しました。

さらに、女子高校生・女子受験生とその保護者へ工学の魅力を直接伝えるため、京都大学オープンキャンパス2022の一環として「女子高校生のための工学のススメ」を新たにオンラインで開催しました。150名（定員）の参加申込があり、当日は教員、卒業生、在校生による講演、各学科による対話型企画を行いました。



地球系 2022年度の主な研究成果

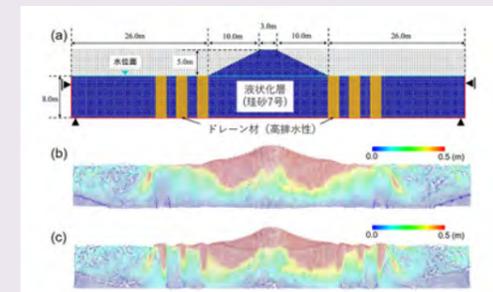
● 斜張橋ケーブルにおけるウェイク振動の現象解明と制振

斜張橋のケーブルには、二本のケーブルが近接して並列に張られているものがあります。この並列ケーブルにおいては、強風時に下流側のケーブルでウェイクギャロッピングという振動現象が発生しますが、ダンパー等の制振装置では制御が難しいことが知られています。本研究では、振動中のケーブルに作用する空気力のヒステリシス特性を考察し、この現象の解明に成功しました。また、ケーブル表面にスパイラル突起を設置すると、ケーブル周りの気流が変化し、そのヒステリシス特性が消滅することで、振動が抑制されることを明らかにしました。並列ケーブルにおいても、空気力学的にケーブルの空力振動を制御することが可能になると考えられます。



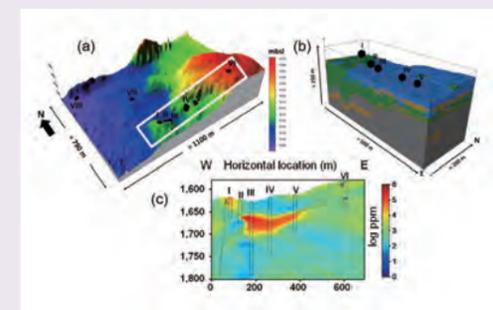
● 地盤の大変形予測シミュレーション

我々の生活の基盤である「地盤」は土粒子の集合体で、その間隙には水や空気存在する複雑な混合材料です。地盤はひとたび地震外力を受けると、土粒子間の結合が失われて液状化し大変形を起こします。河川の治水に欠かせない堤防は、その基礎地盤が液状化すると堤防を支持できなくなり、崩壊します。この崩壊挙動を粒子法と呼ばれる大変形解析法によってシミュレーションする技術を開発しています。液状化対策として排水性の高いドレーン材を設置した堤防の解析では、堤防の大変形とドレーンからの水の排水を上手く再現しています（図）。この手法を用い、地震時の堤防崩壊メカニズムを知ることおよび対策工の効果を評価することができます。



● 海底金属資源の存在形態と成因の解明に向けて

需要が世界的に急増している金属資源の探査は、陸域のみでなく海域にも広がっています。しかし深い海底での調査は難しく、少ない情報量から資源の有無を正確には評価できません。そこで鉱床を作る熱水の流動シミュレーション、海底下の電気的性質の解析、掘削孔試料分析による金属濃度の空間分布シミュレーションという物理・化学・地学的手法を組み合わせ、総合的に金属資源の存在形態と成因の解明に取り組んでいます。沖縄トラフでは二層に分かれた金属濃集帯の構造を発見し、熱水の海底での急冷と深部での沸騰がその構造を作ったと解釈できました。また広範囲を対象としてレアアース濃集帯の特徴を詳細に明らかにし、資源量算定に結びました。



建築系 2022年度の主な研究成果

● 学生たちの手で更新された吉田ギャラリー

設計演習の講評会がより多様でより開かれたものへ

「設計演習」とは建築学科の学生が1回生から必修で取り組む演習課題の総称で、与えられたテーマに基づいて学生各自が建築の設計を行います。課題提出後には出題者と学生とが討議し合う「講評会」と呼ばれるフィードバックの機会が設けられており、学部生の設計演習の講評会は吉田キャンパス総合研究9号館4階の吉田ギャラリーで実施されています。講評会中だけでなく図面と模型がその後1週間展示されることで、授業外の方も学生の成果物を見ることができます。

コロナ禍以降オンラインとの併用による授業運営の自由度が高まったことから、これまでは難しかった遠隔地からの講師招聘が可能となり、設計演習カリキュラムのアップデートが行われました。現在では、多彩な外部講師を招いた多様性のある課題設定や、動画同時配信も交えたより開かれた講評会が開催されています。一方、展示方法の自由度が小さい吉田ギャラリーは、整備から20年を経てこうした授業実施形態の変化に合わせ難しくなっていました。



学生とのワークショップ形式で行われたギャラリーの改修

そこで建築学科では、日常的な少人数での利用から100名程度で利用する展示講評会まで対応する可変性と、建築設計図面・模型の展示や学内外へのライブ配信に耐える意匠性を備えた場とすべく、2022年度に吉田ギャラリーを改修しました。また新たな展示用什器の設計・制作を学生の学びの機会とするため、建築学専攻学生・教員と什器制作会社とのワークショップ形式でプロジェクトを実施しました。

参加学生たちは実務経験豊富なアドバイザーの先生方の助言を得ながら現在のギャラリーの課題と可能性を調査し、展示方法のフレキシビリティが高く、コンパクトに収納が可能で、壊れにくいシンプルな機構を持つ模型展示台を製作することになりました。什器制作会社の工場を見学し実際の材料や加工機械に触れたり、毎週金曜日の定例会議の場で製作上で直面した課題に助言を得るなどしながら、何度も試作を繰り返し、最終的な製作へと至りました。

新装されたギャラリーは、2023年度より設計演習ほかで使用されます。展示環境が美しく見やすくなり、京大建築学科の魅力を学内外により良く発信できるようになりました。

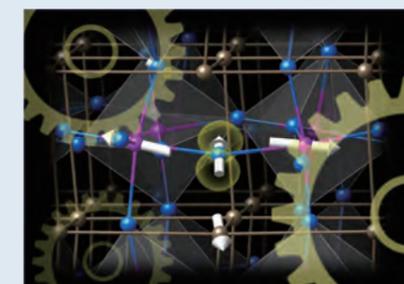


完成した展示什器と改装された展示壁の前で、ワークショップ参加者で記念撮影

物理系 2022年度の主な研究成果

● 「一億分の1」の世界で駆動する機械機能へ

ナノ・量子技術によるパラダイムシフトの渦中にある現在、機械工学分野においても原子・量子レベルで自在に機能する極小機械の実現が急務となっています。しかし、そのような極限スケールで機械的機能を創り出すことは不可能とされてきました。私たちは、物質中に遍在する原子空孔や転位などの従来材料機能を劣化させる因子として回避されてきた格子欠陥が、磁性や強誘電性などといった力学・電気・磁気エネルギーの相互変換が可能な機械機能を発現することを発見しました。こうした機能を発現する格子欠陥によって外部電場・磁場・力場全てと作用・応答する「世界最小の量子機械」実現への可能性を見出しています。



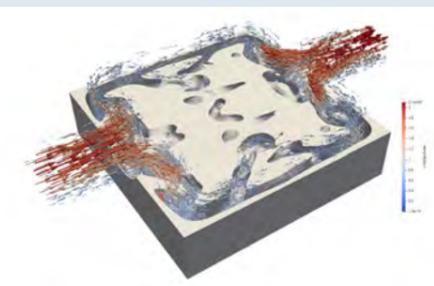
物質中で電気・磁気・機械機能を創り出す格子欠陥



詳しくはこちら

● トポロジー最適化に基づく流体デバイスの設計

機械システムにおいて、流れの最適化は、機械の性能向上や信頼性の向上だけでなく、エネルギーの効率的な利用につながる極めて重要な課題であるといえます。京都大学では、抜本的な構造性能の向上が期待できるトポロジー最適化を、流路設計問題へ展開する方法について研究を進めてきました。本研究では、トポロジー最適化を並列計算手法やメッシュ自動生成手法と統合するフレームワークを構築し、3次元の大規模で詳細なモデルにおいても、高性能な最適形状を自動的に導出することに成功しました。強制対流や自然対流を用いた冷却デバイスや熱交換器の複雑な流路設計への活用を進めています。

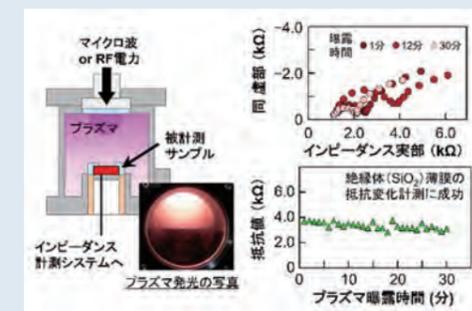


ヒートシンクの最適設計例



● 極限環境に曝された材料の特性変化を“その場”で捉える

宇宙探査機や航空機を扱う航空宇宙工学では、高温状態や電離気体（プラズマ）など、一般的な環境とはかけ離れた「極限環境」に固体（材料）表面が曝されることがあります。極限環境に曝されている材料の特性や損耗状態を知ることが航空宇宙機器の研究開発に重要です。我々は、電気化学分野の計測手法である「インピーダンス分光法」を、プラズマに曝された材料の“その場”計測に新たに応用し、極限環境の影響による特性変化を捉えることに成功しました。この新規その場計測技術を活用し、極限環境に強い材料開発や宇宙機の高精度寿命予測など、航空宇宙工学分野の発展に寄与する研究開発にチャレンジしています。



その場インピーダンス分光計測の概要図（左側）と、計測結果の一例（右上のインピーダンス曲線から、左下のサンプル抵抗値の時間変化を得ることができる）

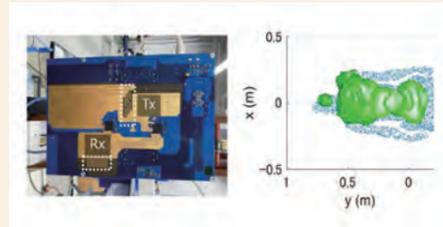


詳しくはこちら

電気系 2022年度の主な研究成果

● 電波イメージングによるワイヤレス生体計測の高度化

ウェアラブルデバイスなどの使用時には不快感が避けられませんが、こうした課題を解決する生体計測として、電波による呼吸・心拍などの非接触計測、いわゆるワイヤレス生体計測が注目されています。図に示すミリ波アレーダを用い、電気工学専攻阪本研究室で開発された電波イメージング法による人体の3次元画像化が実現されているため、ワイヤレス生体計測と併用すれば、注目する人体部位の位置を特定し、その部位の生体信号を選択的に非接触計測できるようになります。こうしたワイヤレス生体計測技術の進展により、医療・ヘルスケア分野における革新的サービス誕生への期待が高まっています。



左:複数の送信素子と受信素子を持つミリ波アレーダの例。右:ミリ波アレーダを用いた電波イメージング。この画像から所望部位の位置を特定することが可能。

3 すべての人に健康と福祉を

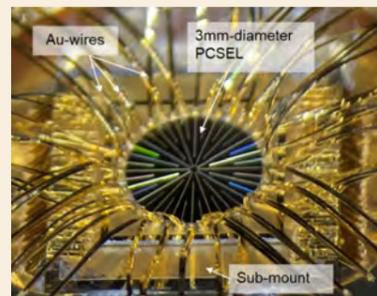
9 産業と技術革新の基盤をつくろう

11 住み続けられるまちづくりを



● スマート製造にゲームチェンジをもたらすフォトニック結晶レーザー

昨近のDX化への要求、脱炭素や半導体への投資の増大等、経済・社会情勢が劇的に変化している中で、デジタル化に適した小型・高効率・高機能フォトニック結晶レーザー(PCSEL)は、スマートモビリティやスマート製造等の様々な分野にゲームチェンジを起こすと期待されています。電子工学専攻(野田研)は、光・電子理工学センターと連携して、すでに、PCSELのパルス動作での高輝度化およびPCSEL搭載LiDARを開発し、スマートモビリティへの適用性の実証に成功していますが、極最近、連続動作においても、大型レーザーに匹敵する輝度(1GW/cm²/sr)を実現することに成功し、まさにスマート製造にゲームチェンジを起こす前段階へ到達しました。



直径3mmのPCSELの顕微鏡写真。連続状態で50W超の単モード動作可能。その輝度は、大型レーザー(CO₂レーザーやファイバーレーザー)に匹敵し、今後、面積拡大(10mm)により、スマート製造分野にゲームチェンジ(=大型レーザーの一新)をもたらすと期待。

3 すべての人に健康と福祉を

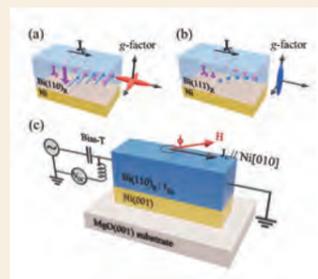
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

9 産業と技術革新の基盤をつくろう



● ビスマス (Bi) における高効率スピン変換の実現

電子の持つスピンを情報担体として用いる「スピントロニクス」という分野が今、高密度情報記録や超低消費エネルギー情報素子、量子計算への応用を目指して活発に研究されています。スピンを生み出すためには電流からスピン流への変換(スピン変換)を効率的に実現する必要があります。単体元素で最も効率的なスピン変換が実現できると期待されるのがBiでしたが、長年の研究者の挑戦にも関わらずその効率はほぼゼロであり大きな未解決問題でした。そこで新たにBiの結晶構造とg因子というスピン磁気モーメントを決定するパラメータの関係に着目し、単体元素で最大級のスピン変換効率を遂に実現しました。



(a), (b) Biの結晶構造の違いとg因子の関係。Bi(110)では面内のg因子が大きく効率的にスピン流が生成できる。(c) 作製したスピンメモリ素子の概念図。

3 すべての人に健康と福祉を

4 質の高い教育をみんなに

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

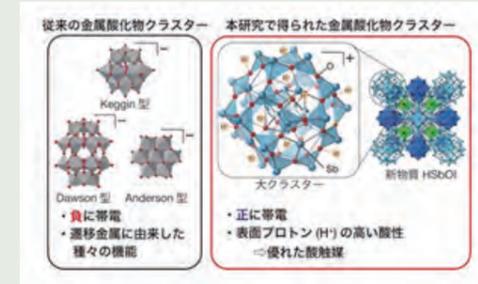
9 産業と技術革新の基盤をつくろう



化学系 2022年度の主な研究成果

● 正電荷の酸化物クラスターの発見 酸触媒としての高い可能性

陰山教授と阿部教授らは、単一相中に複数のアニオン種を含む固体物質である複合アニオン化合物が、可視光で水を分解し、水素を発生する優れた光触媒になることを過去に報告しています。さらなる光触媒活性の向上を目指して、塩素よりも電気陰性度が小さいためバンドギャップが小さくなることが期待できるヨウ素を含む複合アニオン化合物の検討を行なったところ、偶然にも水素、アンチモン、酸素、ヨウ素からなる新物質HSbOI(図右)を発見しました。本物質は、酸触媒として非常に高い反応活性及び選択性をもつことから、これまでの酸触媒とは異なる新たな知見を与え、SDGsの達成に資する触媒材料としての開発が期待されます。



従来の金属酸化物クラスターと本研究で得られた正帯電金属酸化物クラスター結晶 HSbOI

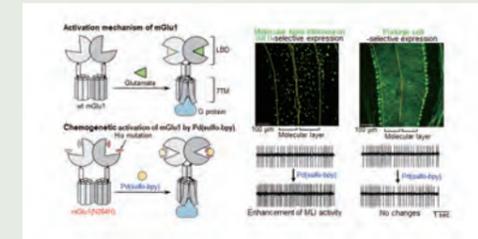
7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

11 住み続けられるまちづくりを



● 脳組織において狙った細胞の神経伝達物質受容体の活性化に成功 —記憶・学習のメカニズム解明に期待—

私たちの脳に存在する1,000億個もの神経細胞は、シナプスという連結部分を介して互いに結合して複雑な神経回路ネットワークを形成し、記憶、学習や情動など高度な脳機能を発現しています。シナプスにおいて主要な興奮性の情報伝達を担っているのは、グルタミン酸という神経伝達物質とその受容体(グルタミン酸受容体)です。本研究では、運動機能や運動学習を支える小脳の神経回路において重要な役割を果たす代謝型グルタミン酸受容体1型(mGlu1)に着目し、その受容体の働きを自在にコントロールする化学遺伝学的新手法の開発に成功しました。本手法は、他のグルタミン酸受容体にも適用可能であると考えられ、個々のグルタミン酸受容体に関わる神経回路の詳細な理解が大幅に加速すると期待されます。



代謝型グルタミン酸受容体1型(mGlu1)を用いた新手法(配位ケモジェネティクス法)の模式図(左図)とその代表的な結果(右図)

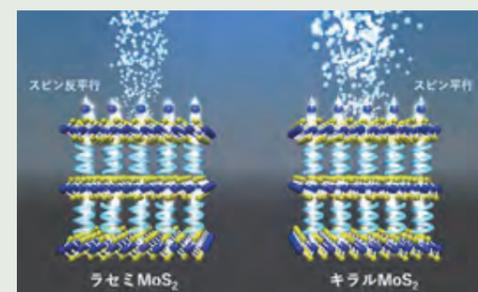
3 すべての人に健康と福祉を

9 産業と技術革新の基盤をつくろう



● 電流中の“スピン”の制御により水電解の効率化を実現

持続可能な社会の実現が期待される中、水の電気分解(水電解)による水素製造技術が注目されています。水電解によって水素を製造するには、負極での水素発生反応に加え、正極での酸素発生反応が必要になります。本研究では、二硫化モリブデン(MoS₂)と呼ばれる層状化合物の層間にキラル分子を挿入した新奇な化合物である「キラル MoS₂」を創製し、この物質が電流中のスピンの向きを同方向に揃える性質を持つことを明らかにしました。同化合物を電極上に塗布するだけで、電流中の約75%ものスピンの向きが同方向に揃い、過酸化水素の生成を抑制することで、水電解効率のボトルネックであった酸素発生反応の効率化を実現しました。



キラル MoS₂による酸素発生効率向上の模式図。電流中のスピンの向きがランダムの場合(左)と平行に揃った場合(右)

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

9 産業と技術革新の基盤をつくろう



8 国際交流の状況

京都大学工学部・工学研究科は、基礎研究を重視して自然環境と調和のとれた科学技術の発展を図るとともに、高度の専門能力と高い倫理性、ならびに豊かな教養と個性を兼ね備えた人材を育成するため、教育・研究における国際交流を推進し、学術・研究の発展を通じて、国際社会へ貢献していきます。

欧州 (NIS 諸国を含む) (8)	協定締結機関名 (17)
英国	バーミンガム大学 工学研究科等
オランダ王国	デルフト工科大学
スウェーデン王国	チャルマーシユ工科大学 リンシェーピング大学
チェコ共和国	チェコ工科大学
ドイツ連邦共和国	ハインリヒ・ハイネ大学 (デュッセルドルフ) 有機化学及び高分子化学研究所
	ドルトムント工科大学 生物化学・化学工学部
	フライブルク大学 工学部・工学研究科
	フライブルク大学 マイクロシステム工学部・工学研究科 (アメリカ合衆国・ミシガン大学を含めた3大学間協定)
ノルウェー王国	ノルウェー科学技術大学
フランス共和国	国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校
	ピエール・マリイ・キュリー大学 (パリ第6大学)
	レンヌ第一大学 SPM・ESIR
	レンヌ第一大学 IUT de Lannion
	地球物理学パリ研究所 国立高等研究実習院
ポーランド共和国	AGH科学技術大学

中東 (1)	協定締結機関名 (1)
アラブ首長国連邦	アラブ首長国連邦大学理学部及び工学部

アフリカ (2)	協定締結機関名 (2)
エジプト・アラブ共和国	カイロアメリカン大学 理工学部、工学研究科
ケニア共和国	ジョモケニヤッタ農工大学

アジア (8)	協定締結機関名 (15)
インド	国立学際科学技術研究所
インドネシア共和国	ブラウィジャヤ大学 工学部・工学研究科
タイ王国	キングモンクット工科大学 トンブリ校 (エネルギー環境合同大学院大学 (JGSEE))
	キングモンクット工科大学 ラカバン校
大韓民国	慶熙大学校工学部 韓国建設技術研究院
台湾	国立成功大学 工学院 大連理工大学
中華人民共和国	同濟大学大学院
	東南大学研究学院
	天津大学理学院
	香港中文大学 (深圳) 理工学院
	吉林大学
ベトナム社会主義共和国	ハノイ土木工科大学
マレーシア	マレーシア工科大学 建築都市環境学部等

国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校との合同ワークショップ



毎回テーマを設定し、建築系研究室の学生が国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校の学生とともに、パリを舞台に現地調査、ディスカッション、プレゼンテーションを行うワークショップを行っています。



パリ市内における現地調査の様子

国際インターンシッププログラム



TUD 生期終報告会



ドルトムント中心部

ドイツのドルトムント工科大学との国際インターンシッププログラムを1990年以来継続して行っています(化学工学専攻)。日本人学生はドイツにて、ドイツ人学生は日本にて、両大学のプログラムコーディネーターが用意した企業で2カ月間のインターンシップを行います。日本人学生はドルトムント工科大学で、ドイツ人学生は京都大学で、オリエンテーションと最終報告会を行い、それぞれの大学で単位認定しています。



京都大学—清華大学環境技術共同研究・教育センター—京都大学オンサイトラボラトリー



日中環境技術共同研究・教育シンポジウム



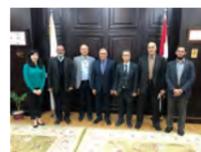
センター設置調印式

環境工学の共同教育研究活動を行うことで環境問題の解決を目指すため、2018年12月に京都大学オンサイトラボラトリーに認定されました。持続可能な社会に必要なとされる環境技術の研究開発を清華大学深圳国際研究院と共同で推進するとともに、民間企業等との共同研究を推進するためのリエゾンオフィスの役割も果たしています。また、京都大学学生のための中国でのインターンシップ研修先や清華大学学生の日本でのインターンシップ窓口としての機能も備えています。



エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)

JICA と連携して日本とエジプト両国の連携事業である「エジプト日本科学技術大学 (E-JUST)」プロジェクトを支援しています。特に E-JUST の材料工学専攻を中心に、教育研究、大学運営・管理に関する支援や連携を行うとともに、ロボティクス・メカトロニクスなどの他専攻との分野横断型の学際的共同研究を推進しています。



E-JUST 訪問



先端マイクロ化学夏季講習会

京都大学卓越大学院プログラム「先端光・電子デバイス創成学」



国際セミナー準備

「物理限界への挑戦と情報・省エネルギー社会への展開」を共通理念として先端光・電子デバイスおよび関連する学問分野を強い責任感と高い倫理性を持つて牽引できる国際的リーダーの育成を目指す5年一貫の博士課程学位プログラムを有しています。



- 協定締結機関
- 海外研究拠点
- 京都大学—清華大学環境技術共同研究・教育センター
京都大学オンサイトラボラトリー



国際交流協定・海外拠点の詳細はこちら

外国人留学生受け入れ人数		
学部	修士課程	博士後期課程
138	125	267
合計 530		
令和5年5月1日現在		

外国人研究留学生等受け入れ人数			
研究生	特別聴講学生	特別研究学生	短期交流学生
17	13	4	3
合計 37			
令和5年5月1日現在			

招へい外国人学者等受け入れ人数		
招へい外国人学者	外国人共同研究者	外国人研究員
31	69	3
合計 103		
令和4年度		



国・地域別の人数はこちら

京都大学の海外機関との交流協定はこちら



9 京大工学基金のご紹介

京都大学工学部・工学研究科が設置している「京大工学基金」をご紹介します。本基金を活用し、美しい景観のテクノサイエンスヒル桂で、研究インフラの整備や福利厚生施設などの充実を図り、高度な専門性と豊かな創造性を持つ、未来の工学を担える人材を育成します。

京大工学基金とは

「基礎となる学理をしっかりと学んでおくことが、将来の幅広い応用展開や発展を可能とするために必要である」という教育理念を堅持し、より地球にやさしい科学技術の創成・発展を担い、明るい未来を創っていくことが「工学」の使命だと考えています。

この使命感のもと、京都大学工学部・工学研究科では、確固たる基礎知識に基づいた高度な専門性と豊かな創造性を持ち、高い品格を兼ね備えた若き優秀な人材の育成に努めています。

工学研究科が桂キャンパスに移転してから、2023年で20年を迎えました。桂キャンパスは自然環境に優れた美しい広大なキャンパスですが、寮などの福利厚生施設が充実しておらず、また、情報学研究科と工学研究科が吉田と桂と地理的に離れていることによって、教育・研究を進めるうえでさまざまな困難を生んでいることも事実です。

この現状をあらゆる手段をもって乗り越えていくため、本基金を設置しました。

本基金を活用し、桂図書館を中核とする情報交流ネットワーク・データ科学教育施設や福利厚生施設の充実をはじめ、学生や若手研究者が研究や課外活動に専心できる環境の整備・維持を図り、未来の工学を担える人材を育成していきます。

今後なお一層の京都大学工学部・工学研究科へのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

京大工学基金の活用事例

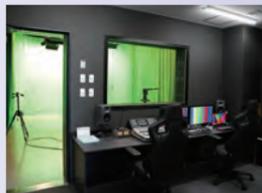
● 学生の米国への短期研修を支援

工学研究科・工学部の学生が国際人としての第一歩を踏み出すことを目的として、海外派遣プログラムを開始しました。令和4年度は11名の学生に対し、米国への短期研修にかかる渡航費用の支援を行いました。



● 京都大学桂図書館の施設整備

令和2年4月開館の桂図書館にて、貴重書庫、メディアクリエーションルーム内のスタジオ等の施設整備を行いました。これにより、工学研究科の貴重な資料の保存や、教職員・学生にとって映像コンテンツ作成等新たな研究発信が可能となりました。



京大工学基金の使途

教育支援	<ul style="list-style-type: none"> 仮想現実を使った安全講習や実験前説等整備 多言語翻訳授業支援システムの開発 24時間学習室の設置 アクティブラーニングルーム等の学部生学習環境の整備
福利厚生施設整備	<ul style="list-style-type: none"> 留学生・邦人学生混住寮、運動施設の整備など福利厚生施設の充実 学生の心・健康のケアのための保健室の運営支援
研究インフラ整備	<ul style="list-style-type: none"> 桂図書館の機能充実 情報ネットワークの進化 オープンデータの促進 など
若手研究者育成支援	<ul style="list-style-type: none"> 青藍プログラムの支援 若手研究者の海外長期滞在費補助 新規研究立上げ補助 など
国際交流	<ul style="list-style-type: none"> 外国人研究者の宿泊施設 On-site Laboの設立・運営支援・海外交流促進
産学連携	<ul style="list-style-type: none"> 地域との連携 ベンチャー立ち上げ支援 など

ご寄附の方法

Web申込または銀行窓口での振り込みが可能です。詳細は工学HPからご確認ください。

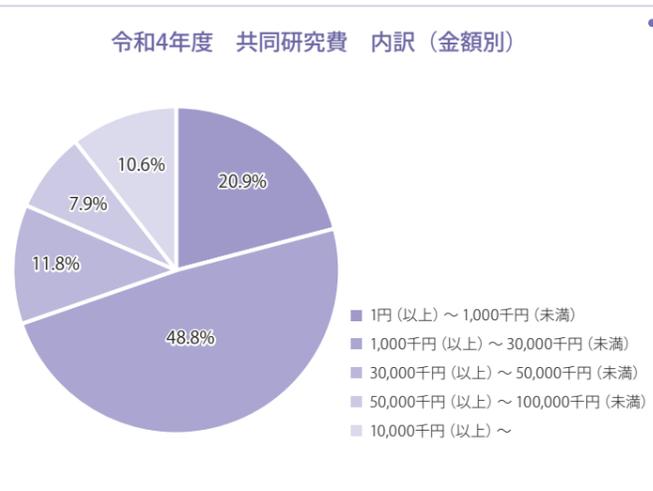
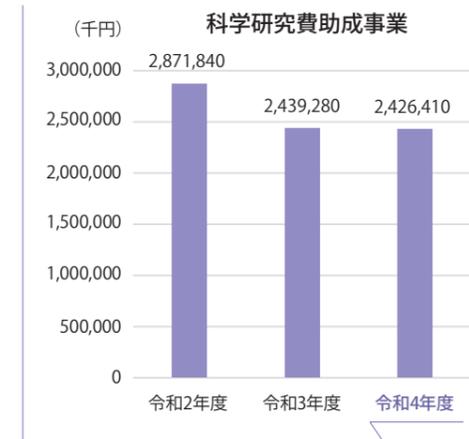
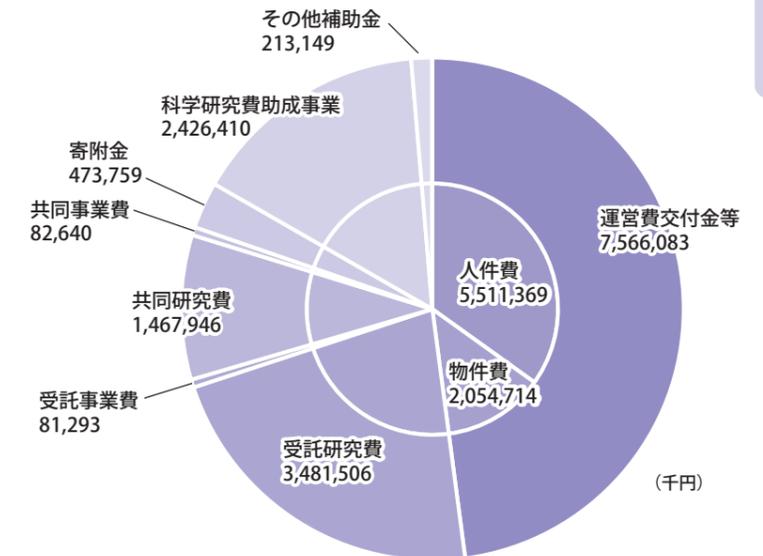


10 財政状況

京都大学工学研究科は、京都大学の中でも最大級の予算規模を有する部局です。令和4年度事業費の概況をお示しします。

令和4年度事業費

区分	金額 (千円)
運営費交付金等	7,566,083
人件費	5,511,369
物件費	2,054,714
受託研究費	3,481,506
共同研究費	1,467,946
共同事業費	82,640
寄附金	473,759
科学研究費助成事業	2,426,410
その他補助金	213,149
その他大型プロジェクト	0
合計	15,792,786



令和4年度 科学研究費助成事業 内訳

区分	採択件数	金額 (千円)
基盤研究(S)	5	168,220
基盤研究(A)(B)(C)	191	992,030
若手研究(A)(B)	66	116,480
特別推進研究	3	447,460
新学術領域研究・学術変革領域研究(A)(B)	34	432,510
特別研究員奨励費	93	81,300
その他	61	188,410
合計	453	2,426,410

教職員数

教員

(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和5年5月1日現在

区 分	教 授	准教授	講 師	助 教	合 計
社会基盤工学専攻	11 (3)	8 (2)	1	17	37 (5)
都市社会学専攻	8 (3)	14		7 (1)	29 (4)
都市環境工学専攻	4 (1)	5 (1)		6 (1)	15 (3)
建築学専攻	14	9		10	33
機械理工学専攻	11	7	3	8	29
マイクロエンジニアリング専攻	6	5	3	5	19
航空宇宙工学専攻	6	1 (1)	1	3	11 (1)
原子核工学専攻	5	3	2	4	14
材料工学専攻	9	10	2	18	39
電気工学専攻	6	2 (1)	4	5	17 (1)
電子工学専攻	6	9	1	6	22
材料化学専攻	8	5	1	11	25
物質エネルギー化学専攻	9	8	1	12	30
分子工学専攻	5 (1)	4	2	8	19 (1)
高分子化学専攻	5 (1)	5	1	8 (2)	19 (3)
合成・生物化学専攻	7	7	4	9	27
化学工学専攻	7	7	1	10	25
附属光・電子理工学教育研究センター		1	1	2	4
附属流域圏総合環境質研究センター	1			1	2
附属量子理工学教育研究センター	1	2			3
附属桂インテックセンター					
附属情報センター				[2]	[2]
附属環境安全衛生センター			[1]		[1]
附属工学基盤教育研究センター	1		5		6
合 計	130 (9)	112 (5)[1]	33 [2]	150 (4)	425 (18)[3]
桂地区 合 計	119 (9)	100 (5)[1]	31 [2]	131 (4)	381 (18)[3]
吉田地区等 合 計	11	12	2	19	44

注1：表中の（ ）内は大学院地球環境学、大学院経営管理研究部、国際高等教育院の流動教員で外数

注2：表中の[]内は兼務教員で外数 注3：特定有期雇用教員を含む

職員

(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和5年5月1日現在

区 分	事務職員	技術職員	特定研究員	合 計
社会基盤工学専攻	1	3	4	8
都市社会学専攻	1	1		2
都市環境工学専攻		2	3	5
建築学専攻		2	1	3
機械理工学専攻	1	5	1	7
マイクロエンジニアリング専攻	1	1	3	5
航空宇宙工学専攻				
原子核工学専攻			2	2
地球工学科				
建築学科				
材料工学専攻	2	4	4	10
物理工学科				
電気工学専攻			4	4
電子工学専攻			9	9
材料化学専攻	2		4	6
物質エネルギー化学専攻	2	2	6	10
分子工学専攻	3	1	2	6
高分子化学専攻		1	1	2
合成・生物化学専攻	1	3	2	6
化学工学専攻	2	1	5	8
電気電子工学科				
工業化学科				
情報学科		1		1
附属流域圏総合環境質研究センター			2	2
附属桂インテックセンター			2	2
附属情報センター			3	3
附属環境安全衛生センター			4	4
桂地区(工学研究科)事務部・桂地区(工学研究科)事務部・吉田	99	4		103
合 計	21		21	21
合 計	136	42	51	229
桂地区 合 計	113	37	45	195
吉田地区等 合 計	23	5	6	34

注：特定職員、再雇用職員、支援職員を含む

学生数

大学院

(黒字：桂地区、青字：吉田地区等) 令和5年5月1日現在

区 分	修士課程		博士後期課程						合 計	
	1 年次	2 年次	1 年次 4月入学	2 年次 10月入学	3 年次 4月入学	3 年次 10月入学	4 月入学	10 月入学	4 月入学	10 月入学
社会基盤工学専攻	75	75	11	6	12	3	19	5	192	[14]
都市社会学専攻	56 [1]	56	18	8	12	6	16	6	158	[21]
都市環境工学専攻	40	42 [1]	5	6	4	5	12	4	103	[16]
建築学専攻	76	91	8	8	15	4	24	7	214	[19]
機械理工学専攻	58	60	8	3	7	1	19	4	152	[8]
マイクロエンジニアリング専攻	37	33	4		4	3	11	1	89	[4]
航空宇宙工学専攻	24	21	4		5		1		55	
原子核工学専攻	22	24	7	2	8		5		66	[2]
材料工学専攻	42	43	13	3	9	2	6	2	113	[7]
電気工学専攻	40	45	3		3	1	10	2	101	[3]
電子工学専攻	32	34	9	1	7		5		87	[1]
材料化学専攻	29	31	6		3		4	1	73	[1]
物質エネルギー化学専攻	39	45	15		6	1	16	1	121	[2]
分子工学専攻	31	38	7	1	8	1	10	3	94	[5]
高分子化学専攻	43	55	13	1	5		8	2	124	[3]
合成・生物化学専攻	27	44	9	2	5	2	15	2	100	[6]
化学工学専攻	33	37	3	1	5		4	2	82	[3]
合 計	704 [1]	774 [1]	143	42	118	29	185	42	1,924	[115]
桂地区 合 計	662 [1]	731 [1]	130	39	109	27	179	40	1,811	[108]
吉田地区等 合 計	42	43	13	3	9	2	6	2	113	[7]

注：表中の[]内は10月入学者数で外数

学部

令和5年5月1日現在

区 分	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	合 計
地球工学科	184	186	187	228	785
建築学科	83	82	81	101	347
物理工学科	239	241	242	290	1,012
電気電子工学科	132	133	140	172	577
情報学科	91	94	94	136	415
工業化学科	244	243	237	318	1,042
合 計	973	979	981	1,245	4,178

令和5年度入学状況

大学院

区 分	修 士 課 程		
	入学定員	入学志願者	入学者
社会基盤工学専攻	58		75 [12]
都市社会学専攻	57	161 [27]	56 [4]
都市環境工学専攻	36	44 [9]	40 [9]
建築学専攻	75	97 [9]	76 [4]
機械理工学専攻	59		58 [5]
マイクロエンジニアリング専攻	30	160 [8]	37 [2]
航空宇宙工学専攻	24		24
原子核工学専攻	23	28 [2]	22 [1]
材料工学専攻	38	49 [2]	42 [2]
電気工学専攻	38		40 [1]
電子工学専攻	35	107 [6]	32
材料化学専攻	29		29 [3]
物質エネルギー化学専攻	39		39 [2]
分子工学専攻	35	188 [27]	31 [4]
高分子化学専攻	46		43 [3]
合成・生物化学専攻	32		27 [3]
化学工学専攻	34	40	33
合 計	688	874 [90]	704 [55]

注：表中の[]内は外国人留学生で内数

区 分	博 士 後 期 課 程		
	入学定員	入学志願者	入学者
社会基盤工学専攻	17	18 (4) [10]	18 (4) [10]
都市社会学専攻	17	* 27 (3) [19]	* 26 (3) [18]
都市環境工学専攻	10	13 [12]	11 [10]
建築学専攻	22	16 (7) [5]	16 (7) [5]
機械理工学専攻	16	10 (2) [4]	11 (2) [5]
マイクロエンジニアリング専攻	7	4 (1)	4 (1)
航空宇宙工学専攻	7	4 (1)	4 (1)
原子核工学専攻	9	8 (1) [2]	9 (1) [3]
材料工学専攻	10	17 [12]	16 [11]
電気工学専攻	10	3	3
電子工学専攻	10	10 [2]	10 [2]
材料化学専攻	9	8 [4]	6 [3]
物質エネルギー化学専攻	11	15 (1) [7]	15 (1) [7]
分子工学専攻	10	10 (1) [2]	8 (1) [2]
高分子化学専攻	15	14 [5]	14 [5]
合成・生物化学専攻	10	11 (1) [6]	11 (1) [6]
化学工学専攻	7	4 [2]	4 [2]
合 計	197	192 (22) [92]	186 (22) [89]

注1：表中の（ ）内は社会人特別選抜で内数、[]内は外国人留学生で内数

注2：入学志願者数と入学者数は令和4年度10月期と令和5年度4月期の合計

*外国人留学生かつ社会人選抜受験者：各1名

学部

区 分	入学定員	入学志願者	入学者		
			男	女	計
地球工学科	185	469 [29]	165 [4]	19 [4]	184 [8]
建築学科	80	297 [4]	67	16 [2]	83 [2]
物理工学科	235	787 [6]	223 [3]	16	239 [3]
電気電子工学科	130	387 [11]	120 [4]	12 [1]	132 [5]
情報学科	90	432 [11]	83	8 [1]	91 [1]
工業化学科	235	323 [14]	206 [3]	38 [5]	244 [8]
合 計	955	2,695 [75]	864 [14]	109 [13]	973 [27]

注1：表中の[]内は外国人留学生で内数 注2：入学志願者は第1志望学科

卒業・修了状況及び学位授与者数

大学院

区 分	修 士 課 程		博士 後期課程	工学博士
	令和4年度	累 計		
工業化学専攻	1,263	212		
石油化学専攻	758	137		
合成化学専攻	582	163		
機械工学専攻	1,154	78		
物理工学専攻	462	38		
機械理工学専攻	212	6		
精密工学専攻	860	56		
冶金学専攻	634	47		
金属加工学専攻	567	43		
エネルギー応用工学専攻	57	2		
航空工学専攻	388	32		
電子物性工学専攻	227	15		
電気工学第二専攻	730	67		
電子通信工学専攻	110	2		
数理工学専攻	785	84		
情報工学専攻	508	44		
応用システム科学専攻	342	10		
土木工学専攻	1,996	143		
交通土木工学専攻	598	14		
土木システム工学専攻	240	23		
資源工学専攻	681	40		
衛生工学専攻	620	54		
環境工学専攻	205	8		
環境地球工学専攻	501	30		
建築学第二専攻	514	51		
生活空間学専攻	159	17		
材料化学専攻	34	805	39	
物質エネルギー化学専攻	41	1,038	73	
分子工学専攻	27	1,095	69	
高分子化学専攻	49	2,228	294	
合成・生物化学専攻	31	864	83	
化学工学専攻	35	1,678	131	
原子核工学専攻	28	1,265	167	
材料工学専攻	44	1,059	22	
電気工学専攻	36	1,676	114	
電子工学専攻	30	1,442	101	
建築学専攻	71	2,471	202	
社会基盤工学専攻	68	1,202	62	
都市社会学専攻	64	1,073	52	
都市環境工学専攻	37	1,023	53	
機械理工学専攻	58	979	50	
マイクロエンジニアリング専攻	26	445	31	
航空宇宙工学専攻	21	551	33	
合 計	700	36,047	2,992	

注：表中の[]内は推薦によるもので内数

学部

区 分	令和4年度	累 計
土木工学科		3,222
機械工学科		2,122
電気工学科		2,112
鉱山学科		357
資源工学科		1,073
冶金学科		1,532
工業化学科		2,125

外国人留学生、招へい外国人学者

外国人留学生受入状況

令和5年5月1日現在

国・地域	学部	大学院		合計
		修士課程	博士後期課程	
アジア (18)				
インド			6	6
インドネシア共和国	9	2	17	28
カンボジア王国	1			1
シンガポール共和国	1	1		2
スリランカ民主社会主義共和国	3		1	4
タイ王国	6	3	12	21
大韓民国	17	7	12	36
台湾	7	2	8	17
中華人民共和国	74	92	157	323
ネパール			2	2
パキスタン・イスラム共和国			1	1
フィリピン共和国	2	2		4
ブータン王国		1		1
ベトナム社会主義共和国	2	1	8	11
香港	1		1	2
マレーシア	3	2		5
ミャンマー連邦共和国	6		4	10
モンゴル国	1			1
中東 (4)				
イラン・イスラム共和国	1		3	4
オマーン国		1	1	2
サウジアラビア王国			1	1
シリア・アラブ共和国		1	2	3
アフリカ (10)				
アルジェリア民主人民共和国			2	2
ウガンダ共和国		1	1	2
エジプト・アラブ共和国		1	3	4
エチオピア連邦民主共和国			1	1
カメルーン共和国			1	1
ケニア共和国		1	2	3
タンザニア連合共和国			1	1
チュニジア共和国		1	2	3
マダガスカル共和国			1	1
モザンビーク共和国		1		1
大洋州 (2)				
ソロモン諸島			1	1
フィジー共和国		1		1
北米 (2)				
アメリカ合衆国	1		2	3
カナダ	1		2	3
中南米 (6)				
エルサルバドル共和国		1		1
コロンビア共和国			2	2
チリ共和国			1	1
ブラジル連邦共和国	1		1	2
ベネズエラ・ボリバル共和国		2		2
ペルー共和国	1			1
欧州 (NIS諸国を含む) (7)				
ウズベキスタン共和国			1	1
英国			2	2
ギリシャ共和国		1		1
キルギス共和国			1	1
ドイツ連邦共和国			1	1
フランス共和国			1	1
ポルトガル共和国			2	2
合計 (49カ国・地域)	138	125	267	530

外国人研究留学生等受入状況

令和5年5月1日現在

国・地域	研究生	特別聴講学生	特別研究学生	短期交流学生	合計
アジア (4)					
タイ王国	1				1
大韓民国	1	1			2
台湾	1				1
中華人民共和国	11	2	4		17
中東 (1)					
トルコ共和国	1				1
アフリカ (1)					
マラウイ共和国	1				1
北米(1)					
アメリカ合衆国		1			1
欧州 (NIS諸国を含む) (6)					
イタリア共和国		2			2
スイス連邦				1	1
スウェーデン王国		2			2
スペイン王国	1				1
ドイツ連邦共和国		2			2
フランス共和国		3		2	5
合計 (13カ国・地域)	17	13	4	3	37

招へい外国人学者等受入者数

令和4年度

国・地域	招へい外国人学者	外国人共同研究者	外国人研究員	合計
アジア (7)				
インド	2	1		3
インドネシア	1	4		5
パキスタン		1		1
マレーシア	2	2		4
大韓民国	1	6		7
台湾		1		1
中華人民共和国	10	23		33
アフリカ (1)				
エジプト・アラブ共和国	1	2		3
大洋州 (1)				
オーストラリア	1			1
北米 (2)				
アメリカ合衆国	2	1	1	4
カナダ	1	1	1	3
中南米 (3)				
コロンビア		2		2
ブラジル連邦共和国		1		1
メキシコ	1	1		2
欧州 (NIS諸国を含む) (12)				
イタリア共和国	1	4		5
英国	1	2		3
オランダ	1			1
スイス		1		1
スペイン王国	1	2		3
チェコ		1		1
ドイツ連邦共和国	2	8		10
ノルウェー		1		1
フランス共和国	3	1		4
リトアニア		1		1
ロシア		2		2
ポーランド共和国			1	1
合計 (26カ国・地域)	31	69	3	103

研究生

研究生等受入状況

令和5年5月1日現在

区分	研究生	研修員等	特別聴講学生	特別研究学生	短期交流学生	合計
社会基盤工学専攻	1 [1]		1 [1]			2 [2]
都市社会工学専攻	2 [2]		1 [1]		1 [1]	4 [4]
都市環境工学専攻	2 [2]			1		3 [2]
建築学専攻	4 [4]		2 [2]	2 [2]		8 [8]
機械理工学専攻	1	2	1 [1]			4 [1]
マイクロエンジニアリング専攻			1 [1]	1		2 [1]
航空宇宙工学専攻						
原子核工学専攻		1	1 [1]			2 [1]
材料工学専攻	2 [2]					2 [2]
電気工学専攻	2 [2]	2		1 [1]		5 [3]
電子工学専攻						
材料化学専攻	1 [1]	2		7		10 [1]
物質エネルギー化学専攻				1		1
分子工学専攻	1 [1]					1 [1]
高分子化学専攻	1 [1]	1		3 [1]		5 [2]
合成・生物化学専攻	1 [1]					1 [1]
化学工学専攻						
地球工学科						
建築学科		1	1 [1]			2 [1]
物理工学科			2 [2]			2 [2]
電気電子工学科			1 [1]			1 [1]
情報学科			1 [1]			1 [1]
工業化学科			1 [1]		2 [2]	3 [3]
合計	18[17]	9	13[13]	16 [4]	3 [3]	59[37]

注1：表中の[]内は外国人で内数
注2：研修員等は研修員、受託研究員等、日本学術振興会特別研究員 (PD) 等を含む

蔵書数

蔵書数及び所蔵雑誌種類数

令和5年5月1日現在

図書室名等	蔵書数			所蔵雑誌種類数		
	和書	洋書	合計	和書	洋書	合計
桂図書館	124,313	194,429	318,742	2,516	5,679	8,195
工学研究科・工学部北図書室	9,930	1,409	11,339	26	3	29
工学研究科・工学部南図書室	27,057	27,050	54,107	839	777	1,616
合計	161,300	222,888	384,188	3,381	6,459	9,840



Webで確認する
データから見る工学研究科・工学部

アクセスマップ

Web で更に詳しいアクセスを確認する



工学 HP

本学 HP

桂キャンパス

1 Cクラスター階段から臨む早朝の風景



3 A・Bクラスターを繋ぐプロムナード



4 Aクラスターコミュニケーションスクエア



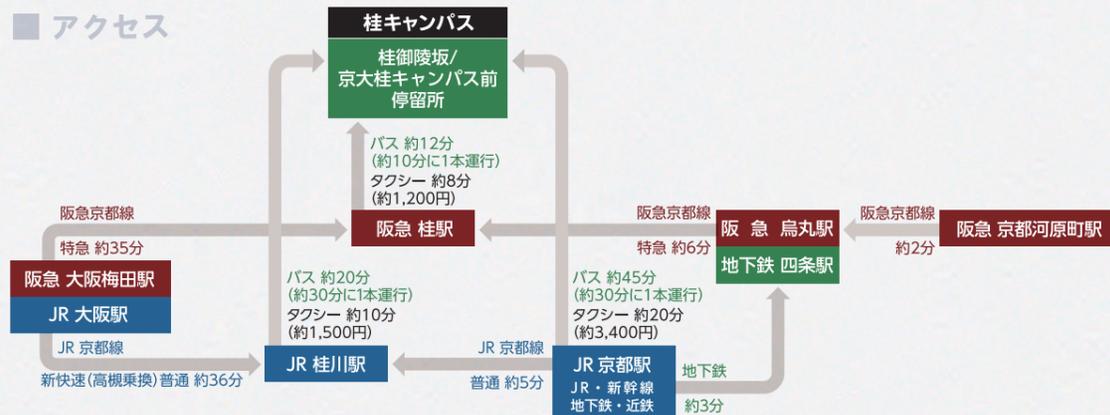
2 桂図書館



桂図書館の隣には、バスケットゴールやストレッチ用の健康遊具等が設置されています。



■ アクセス



吉田キャンパス



■ アクセス



5 百周年時計台記念館



6 総合研究9号館



宇治キャンパス



■ アクセス



7 正門



8 宇治おうばくプラザ

